
狐

浅葱しの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐

【Nコード】

N0666Z

【作者名】

浅葱しの

【あらすじ】

書生・深山長助と、小さなお稲荷様・すずのお話。

日常に限りなく近い非日常をテーマに、ゆっくりと描き出していきたいと思っています。

以前、dNovelsで連載していた”狐”に加筆修正したものになります。

現在、NOVELISTで連載している”狐”と同一のものです。

始

春の終わり。

桜は花弁を落とし、葉が萌える。

風がそよぎ、空は碧く、鳥の囀りも心なしに明るく聞こえる。

暖かで穏やかな、ありふれた晩春の一日。

そんな陽気に思わず大あくびをこぼす若人が一人。

若人の名は深山長助。色白でひょろりと背が高く、無造作に伸ばされた栗色の髪は、また無造作に一つに束ねられている。顔形は、まあまあ美丈夫の部類に滑り込めるであろう。

彼は五人兄妹の四番目、自由気ままな身分であった。十七の夏の時分、長助は文士として立身することを誓い、大見栄を切って東京板橋は蓮沼の実家を出、猿樂町にて下宿生活を送った。

細々と同人誌などで食いつなぐもとうとう生活に窮し、十九の春には実家に戻った。それが三月ほど前の話である。現在は、長兄が継いだ家業の八百屋を手伝うことで家賃の代わりとし、長兄家族の居候の様な形で暮らしている。

とうとう二十歳になるうかというのに未だにぶらぶらとしている末弟に、兄もため息の数が増えようというもの。

しかし、元来楽天的な性格の長助はそんな兄の憂慮をよそに、今日も気ままに筆を執るのだ。

「道明寺はいかがですか、美味しいですよ」

美しい鳥の声にも負けない、可憐な声が高い空に舞う。
売り子の娘は、そのまんまる顔に満面の笑みを浮かべていた。

「おいしそうですね、五ついただけますか」

——先生へのいい手土産になった。先生は甘いものに目がないからな。

”先生”とは、長助が猿楽町で下宿していたところから師事している文学の師匠で、今でも月に二度か三度、執筆した作品を見せに伺うことを常としている。

スネ齧りの貧乏文士故に普段は手ぶらで訪問するのだが、今日は少しだけ懐が温かった。少女向けの雑誌に、掌編を一編、使ってもらえたのだ。

むろん、それも”先生”の助言が大いに力を添えてくれたからに違いない。しかし、ささやかながら恩返しが出来るようになったことに、長助は静かな喜びを感じていた。

「ありがとうございます、またどうぞ」
「どうもありがとう」

長助が柔らかに微笑むと、娘はぱつと頬をあからめた。美男子というものはつくづく得なものである。

春のうららかな日差しを受けながらのんびりと歩を進め、稲荷の社の前まで来た。ここを右に折れて更に左に折れたところが、先生の家だ。

——稲荷の社、か。

普段は気にもかけない、小さな社だ。

それなのに今日はなぜか少し、心にひっかった。呼ばれた、という感覚なのだろうか。

不思議な気分を春の陽気の所為にして、長助は社へと足を向けた

鞠

少し朱の剥げた鳥居をくぐり、小さな賽銭箱に銭を投げ入れる。長助は、ここはひとつ、己の書いた小説が世に出ますようにと祈ることにした。

「はて、お稲荷さんってのは五穀豊穡の神様だったかな……まあお門違いだったらごめんなさい、つと。」

独りごちて祈りつつ、さてばちばち先生の家に向かおうと拝殿に背を向けると、左側の稲荷像の脇に手鞠が落ちているのに気付いた。古ぼけてはいるものの、上等なものであることがなんとなく感ぜられる。近所の子どもが忘れたものだろうか。それならお稲荷様に預けておけば、なくなることもなからう。

拾い上げようとかがんだ時、右目の奥の方にちりりとした痛みが走った。大きな痛みではなかったし、最近寝不足だからなあなどと呑気に考えた長助はさして気に留めることもなかった。

小さな鞠を手に取り、さてどこに置こうかとあたりを見回した。すると、ちりん、という細い鈴の音と共に……

「かえして」

子どもらしい甲高い声ながら、凜として空気を震わせるような、そんな不思議な声が聞こえた。長助は、今度は声の主を探してあたりを見回すことになる。

すると右側の稲荷像の陰から、8つくらいだろうか、艶やかな黒髪と赤みがかった瞳が印象的な女の子がこちらを覗いていた。

「君のかい」

長助は、自分の柔らかな物腰が子どもに受けが良いことを承知していた。近所の子供らの子守は長助の副業とも言えた。

しかしこの女の子は長助をひたと見据えて表情一つ動かさない。少し観察するとなんとなくその理由もわかった。女の子の着物は汚れ一つない綺麗なもので、しかも普段着というには瀟洒な一品である。

綺麗に切りそろえられた緑の黒髪には鈴をあしらった小ぶりの髪飾りがついていた。最前の鈴の音は彼女の髪飾りによるものだろう。さては深窓のご令嬢で、殆ど外の人間と触れあったことのない子なんだな、と長助は勝手に納得し、さらに優しく声をかけた。

「盗ったつもりじゃないんだ。」

目線を合わすように膝を折り、鞆を差し出す。ややためらうように鞆と長助を交互に見、女の子はようやく鞆を手にとった。

ほっとして長助が微笑むと、女の子は鞆を胸にぎゅっと抱きしめた。

「大切なものなんだね」

女の子は黙って上目遣いにこちらをうかがっている。鞆を盗られたことに怒っているでもなく、鞆が返ってきたことに安心して風でもない。

ただ淡々と、目の前の長助を見つめているのだ。さすがの長助も少しばかり、気まずいような気分になってしまう。

「ええっと……もう、なくさないようにね。じゃあ、僕は行くよ」

「……………とう」

「え？」

「ありがとう」

消え入りそうな声でそれだけ言うと、年相応の少し羞恥んだ表情を浮かべ、女の子は社の裏へと走り去った。

ちりん、ちりん、と、鈴が鳴く音が遠くなるまで、長助はその背中を見送った。

……社の裏に道が通じているのだろうか。ずいぶんこのあたりの地理にも明るくなったつもりだったが、まだまだ知らないことがあるものだ。

長助はそう思い、先生の家へと急ぐことにした。

「やあ、深山くん。よく来たね。」

先生の家で道明寺の包みを開けると、そこには四つの道明寺が入っていた。長助は、狐につままれたような気分で四つの道明寺を見つめるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0666z/>

狐

2011年12月2日21時51分発行